

## 家族役割の何が阻害されることが問題か

### —Work-Family Conflict を規定する家族役割の男女間の相違—

内田 哲郎

(くらしのつくり方研究所)

#### 【要旨】

本稿の目的は、「ワーク・ファミリー・コンフリクト (WFC)」の時間的側面に関して、どのような家族役割が阻害されるとワーク・ファミリー・コンフリクトと認識されるかを明らかにすることである。分析は、NFRJ08 のデータを用いて、夫婦共働きの男性、妻が就業していない片働きの男性、夫婦共働きの女性のそれぞれごとに行った。

分析の結果、以下のことが明らかになった。①WFC 度に関係する家族役割の中身は、男性と女性で異なる。また、男性においても、夫婦共働きの男性と片働きの男性では異なる。②共働き男性の場合は子供と関わる程度が少ないと WFC 度が高まり、片働き男性の場合は配偶者や子供との関わりが少ないと WFC 度が高まる。しかし、男性の場合、家事実施頻度は WFC 度には関係しない。特に、共働き男性の場合は、労働時間の長さにより阻害されるのは子供との関わりと家事への関わりだが、そのうち本人の WFC 度に関わるのは子供との関わりのみである。一方、共働き女性の場合、配偶者や子供との関わりは WFC 度にはあまり関係せず、家事実施頻度が低いと WFC 度が高まる。以上の結果は、現在その必要性が言われている仕事と家庭生活の調和がとれた社会となった場合も、結果的には男性の家事参加には結びつかない可能性を示唆する。

**キーワード：** ワーク・ファミリー・コンフリクト、家族役割の中身、男女間相違

#### 1. はじめに

本稿は、いわゆる「ワーク・ファミリー・コンフリクト (Work/Family conflict)」の時間的側面に関して、家族・家庭におけるどのような時間ないし行動が阻害されるとワーク・ファミリー・コンフリクトと認識されるのかを探ることを目的とする。

ワーク・ファミリー・コンフリクトについて、Greenhaus and Beutell(1985)は「個人の仕事と家族生活領域における役割要請が、いくつかの観点で互いに両立しないような役割葛藤の一形態」のことと定義する。そして、このワーク・ファミリー・コンフリクトには、「家族生活領域から職業生活領域への葛藤 (Family-Work Conflict : 以下 FWC とする)」及び「職業生活領域から家族生活領域への葛藤 (Work-Family Conflict : 以下 WFC とする)」の 2 つの方向があり、それぞれ①時間、②ストレス反応、③行動に基づく葛藤という 3 つの形態が存在すると説明している<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 本稿では、「職業生活領域から家族生活領域への葛藤」を示す場合に WFC、WFC と FWC の両方を含め

昨今の日本における、仕事による葛藤に直面する家族役割を取り上げているワーク・ファミリー・コンフリクト研究も、この枠組みにもとづくものが多い(金井 2002; 金井 2006; 吉田 2007 など)。

では、これらワーク・ファミリー・コンフリクト理論が想定する「家族役割」とは、具体的にはどのような中身を意味するのか。

家族役割、もしくは家族に関わる時間や行動を想像したとき、そこにはさまざまな領域が存在することは想像に難くない。配偶者との関わり、育児や子供の世話、もしくは子供との関わり、家事や家庭経営、親との関わりや老親の介護・介助、きょうだいとの関わり等、家族役割とひと言でいっても、そこにはさまざまな領域や行動が存在する。極端なことをいえば、「家族」に関係するすべてのモノ(人とは限らない)・コトへの関わりが包括されるともいえる。

だが、ワーク・ファミリー・コンフリクト理論が、「家族役割」を、家庭に関するどのような行為に時間を割き、あるいはどのような責任を果たすことを意味する概念として用いているのかは、必ずしも明確にされていない。むしろ、その具体的な内容は明確にはされず、包括的な概念として利用されてきている。実際、Carlsonら(2000)が開発したワーク・ファミリー・コンフリクト尺度(WFCS)における「家族役割」に関する表記は、「家族と過ごしたい時間」「家庭での責任や家事」「家族との活動」「家族としての責任」「家族と時間を過ごす」「家族といろいろなことを」「家族のために」「家庭でのストレス」「良い親や配偶者」といった形で「家族役割」を一元的ないし包括的に捉えており、その具体的な領域や行動に則して明らかにするような尺度とはなっていない(日本語訳は、渡井ら(2006)、吉田(2007)による)。

本稿で課題にするのは、このようなWFCにおける「家族役割」の具体的な中身である。すなわち、職業生活領域によって葛藤状態にさらされる「家族役割」とは、具体的には家族・家庭におけるどのような役割ないし行動のことか。それは家事をめぐるものか、子育てもしくは子供との関わりに関するものか、あるいは夫婦関係に関するものか、もしくはそれ以外の何かか、という点である。

WFCが想定する家族役割の中身を明らかにしようとする場合、WFCの規定要因を分析する中で、いくつかの家族に関わる要素(家族関連属性)とWFCとの関係を明らかにすれば、どのような家族役割の少なさがWFCと評価されるかを推測することが可能である。しかし、ワーク・ファミリー・コンフリクト研究では、家族関連属性は、むしろ仕事を妨害する因子すなわちFWCに関わる因子として位置づけられており(Frone 1997; 藤本・吉田 1999)、いくつかの家族役割に関わる時間や行動の多寡とWFCとの関係を明らかにした研究は多くはない。また、家族関連属性とWFCとの関係に言及した先行研究をみても、家族関連属性として位置づけ分析の対象とされた家族役割は、家事労働(時間もしくは頻度)と、子供

---

た全体概念を示す場合は「ワーク・ファミリー・コンフリクト」と記すことにする。

の世話もしくは子供に関わる時間(頻度)にとどまっており(Voydanoff 1988; 裴 2005 など)、さまざまな家族役割を網羅的に捉えようとしたものは見あたらないのが実情である。

一方、家族に関わるどのような役割・行動が少ない場合に WFC を感じるのかを直接的に測定した研究群もある。そのひとつに松田(2006)の研究があげられる。松田が実施した調査では、育児期の共働き夫婦を対象に、WFC を、夫婦関係において感じる WFC、家事遂行において感じる WFC、育児において感じる WFC と、3つの領域における WFC を直接的に測定している。松田が公表している結果から推測すれば、男女ともに家事領域での WFC が高い(仕事が原因で家事がおろそかになる、家事をする元気がないなど)、夫婦関係領域や育児領域での WFC は女性に比べて男性で高めといった傾向を読み取ることができる。しかしながら、個々の調査対象が感じる総体としての WFC との関係は分析されないため、それぞれの領域での葛藤の意味や、WFC 総体の中での位置づけが明らかにはされない。さらに、松田自身も指摘していることだが、調査自体が有意抽出で行われているため、そこから得られた結果も「仮説彫琢」的なものとなっている。

また、類似した研究のひとつとして、Small ら(1990)による過度な労働(Work Spillover)に関する研究がある。Small らは、過度な労働が家庭生活における主要な4つの領域(夫婦関係、子供との関係、家事、レジャー)のどこに影響を与えるかを明らかにした。ただし、松田の研究同様、調査対象となったサンプルが、男性の、それも極めて偏った層にとどまっているなどの限界を有している。

ワーク・ファミリー・コンフリクト理論の出自を考えれば、ワーク・ファミリー・コンフリクト研究が主要な論点としてきた家族役割は、女性の役割とされてきた家事遂行や子育てなどの家庭における再生産活動にとどまるのは、ある程度納得がいく(西川 1998)。その領域を分析する限りは、WFC が想定する家族役割の中身を議論する必要性はそれほど高くないかもしれない。しかし、WFC の議論がすでにかなり以前から男性をも含めて議論されるようになってきていること(Gutek et al 1991; 西川 1998)、近年の日本においては、家庭における介護役割が大きな位置を占めていること、また、家族形態の多様性などを鑑みると、WFC が意味する家族役割の内実について、もう少し細かく見ていく必要があるのではないだろうか。また、家族役割を多かれ少なかれ担っている個々人が直面する WFC の中身が仮に異なるとすれば、その解消のために必要・有効な社会施策も異なる可能性も予想されるのである。WFC における「家族役割」の中身が異なることは、昨今、行政もその推進に力を入れている「ワーク・ライフ・バランス(Work Life Balance : 以下 WLB とする)」がとれた社会と化した際に、個々が重視し確保しようとするライフの中身が異なる、ということでもある。その意味では、WFC が意味する家族役割の中身を明らかにすることは、現在進行中の WLB のさまざまな施策の行く末を予想するための足がかりにもなり得ると思われる。

以上のような関心にに基づき、本稿では、個々が感じる WFC は、どのような家族役割の阻害と結びついているのか、すなわち、WFC における家族役割の内実を、NFRJ08 のデータ

を用いて明らかにしていく。なお、NFRJ08 は、日本の家族に関する包括的な調査であり、WFC を課題の中心に据えた調査ではなく、WFC に関する質問項目も限られる。そのため、筆者が抱く関心・課題を網羅し究明することは難しい。しかしながら、その分析の端緒を示すことは可能と考える。

## 2. 分析枠組みと使用するデータ

### 2.1 分析の基本的な枠組み

本稿では、NFRJ08 のデータを用いて、個々が感じる WFC という評価と、それが、どのような家族との時間ないし家族との関わりの少なさと結びついているのかを明らかにする。

家族との時間／家族との関わりの少なさに関しては、本来、本人が望む時間量・頻度・質と、実際に得られている時間量・頻度・質との差により測定する方が、より正確性を期待できる。だが、NFRJ08 では、家庭生活、家族との関わりに関するいくつかの領域の時間または頻度のみを測定している。従って、本稿における分析の基本枠組みは、WFC の程度と、家庭生活におけるいくつかの領域にかける時間量または頻度の多寡との関係を明らかにすることにする。

また、家族役割領域に関しては、先述した通り、さまざまな領域が想定されるが、今回の分析で取り上げるのは、「配偶者役割＝配偶者との関わり」「親役割＝子供との関わり」「家事遂行役割＝家事実施度」の 3 領域のみにとどめる。NFRJ08 では、他に親・義親との関係、きょうだいとの関係なども聴取しているが、親・義親やきょうだいを恒常的な役割関係のある家族とみなすかどうかは、対象となる親やきょうだいの生死や居住関係、及び回答者自身における個々の成員の位置づけが大きく影響してくると思われる。また、親に関していえば、その健康状態や介護・介助の必要度合いによって、役割の重要度が大きく異なってくることが予想される。これらをすべて統制しようとする、分析が極めて複雑化し本来の目的を達成できなくなる恐れがある。それを避けるために、今回は、既婚者において最も基本的な役割と位置づけられる上記 3 領域にのみ焦点をあて分析することとした（その意味では本稿における分析は包括的な分析の手前の試験的な分析と位置づけられる。今回捨象した他の役割領域を含めた包括的な分析は、また別の機会の課題としたい）。

なお、WFC の程度や家庭生活における各領域にかける時間量ないし頻度の多寡は、いずれも性別や夫婦共働きか否かによって異なることが予想される（金井 2002）。そこで、本稿では、夫婦共働きの男性、妻が就業していない（収入を伴う仕事についていない）片働きの男性、夫婦共働きの女性という 3 つのグループごとに分析していくことにする。

### 2.2 使用するデータ

分析には NFRJ08 の若年票調査票（回答者は 28～49 歳男女）によるデータを用いる。対象者は、現在就業中であり、かつ配偶者及び 12 歳以下の子供と同居している男女とした。

就業者のうち、自営業や内職従事者は家族・家庭に関わる時間と労働時間との区別が比較的つきにくいという特性があるため、今回は分析対象から除外することとした。子供の年齢を12歳以下と限定したのは、WFCが相対的に高まるのは子供が12歳以下という知見(西村 2006 など)によるところが大きい。また、子供が中学生以上になるとそれまでとは異なる生活時間になる傾向が強まり、結果として子供を含めた家族と関わる時間の取り方も異なってくる傾向がみられる(井田・他 2009)。今回の分析にあたり、この影響をコントロールするため、子供の生活時間にさほど大きな変化が出てこない年代に限定することとした。なお、NFRJ08では、健在する第1子から第3子に関して、対象者との関係を個別に聴取しており、「子供全体」ではなく、特定の子供との関係について分析することが可能である。そのため、確実に回答が得られている健在する第1子に焦点をあてて分析することとし、12歳以下の健在する第1子と同居状態にあることを条件とした。

以上の条件に該当するサンプルを抽出したところ、511サンプルが得られた。ここから、分析に使用する主要な変数において欠損値があるサンプルを除外、さらに夫が現在就業していない女性(1サンプルのみ出現)を除外した。こうして最終的に残った479サンプルを用いて分析を行った。内訳は、共働き男性が144サンプル、片働き男性が155サンプル、共働き女性が180サンプルである。

### 2.3 主要な変数

NFRJ08では、WFCを「仕事が原因で家族と一緒に過ごす時間が十分とれない」「家にも仕事のことを気になってしかたがないことがある」の2つの質問項目で測定している。前者が「時間」ベースのWFC、後者が「ストレス」ベースのWFCに該当する。このうち、本稿では「時間」ベースのWFCのみを変数として取り上げる。後述する家族役割領域で取り上げる変数が時間や頻度により測定されているため、「ストレス」ベースのWFCを感じていたとしても、それが例えば家事遂行頻度の多寡に影響するとは限らないからである(たとえ仕事が気になっていても、家事を行うこと自体はできる)。このWFC変数について、質問紙では「あてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」の4段階で聞いている。これらについて、それぞれ4点~1点と数値化し、これをWFC度とした。従って、スコアが高いほど、WFC度が強いことになる。

配偶者との関わりについては、夫婦の平日、休日の会話時間に基づき、「1週間あたりの会話時間」変数を作成した。新変数の作成は、まず、「0分」=0、「30分未満」=15、「30分~1時間未満」から「2時間30分~3時間未満」はそれぞれの中央値、「3時間以上」=195(3時間15分)と数値化し、さらに「平日の回答×5」と「休日の回答×2」を和して「1週間の会話時間(分)」とした。これを60で除することにより、「1週間の会話時間(時間)」を算出し、これを「配偶者関与度」の得点とした。このスコアが高いほど、配偶者との時間が得られていることになる。なお、表1で表した平均時間の少数の桁は、「分」ではなく10進法による表示である。

次に子供との関わりだが、同居する第1子と「一緒に遊ぶ」「知識や技能を教える」「一緒に夕食をとる」の3項目について、「ほぼ毎日」「週に3~4回」「週に1~2回」「月に1~2回」「年に数回」「まったくない」の6段階で聞いているものを、それぞれ5点~0点と回答を数値化し、その合計得点を「子供関与度」の得点とした。最大値は15、最小値は0で、スコアが高いほど、子供（健在第1子）との時間が得られていることを示す。

家事実施度も子供との関わり同様、頻度により測定されている。「食事の用意」「食事のあとかたづけ」「食料品や日用品の買い物」「洗濯」「そうじ」の5項目について、「ほぼ毎日」「週に4~5回」「週に2~3回」「週に1回くらい」「ほとんど行わない」の5段階で聞いているものを、それぞれ5点~1点と回答を数値化し、その合計得点を「家事実施度」の得点とした。最大値は25、最小値は5となり、子供関与度と同様、スコアが高いほど家事を実施する頻度が高いことを示す。

## 2.4 分析方法

本稿では、共働き男性（妻は就業中）、片働き男性（妻は非就業）、共働き女性（夫は就業中）の3つのグループにおいて、WFC度を目的変数、配偶者関与度、子供関与度、家事実施度を説明変数とする重回帰分析を行い、これら3領域のWFCへの影響度を測定する。

この際、対象者世帯における3領域の必要性・重要性に影響を与えることが予想される、配偶者の家事実施度、配偶者の1日あたり平均労働時間（配偶者が就業中のグループのみ）、第1子の年齢、同居する子供の人数、親（義親）との同居有無、ジェンダー役割意識を統制変数として分析に加える。なお、配偶者の家事実施度の算出方法は本人の家事実施度と同様である。また、親（義親）との同居有無は、同居=1、非同居=0とするダミー変数として設定する（変数名は「親同居ダミー」）。ジェンダー役割意識は、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」「子供が3歳くらいまでは、母親は仕事を持たずに育児に専念すべきだ」「家族を（経済的に）養うのは男性の役割だ」という3つの意識変数への回答（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階）にもとづき、それぞれ4点~1点の数値を与え、その合計得点を変数として採用した（最大値=12、最小値=3）。

なお、WFCに関する従来の研究の多くは、WFC度を規定する要因として本人の労働時間の影響を指摘している。しかし、今回はこの変数は除外して分析する。というのも、今回の目的は、どの家族役割領域の遂行が阻害されるとWFC度が高まるかを知ることであり、WFC度に影響を与える職業上もしくは家族特性上の要因を探るものではないからである。また、そもそも今回の目的変数は「仕事が原因で家族と一緒に過ごす時間が十分にとれないでいる」という設問によるものであり、その認識の強さに影響を与える仕事上の変数として唯一労働時間を採用するのは、あまりにトートロジーとなるからである（仕事が原因で家族と一緒に過ごす時間が十分にとれないのは、仕事が忙しいから）。

### 3. 分析結果

#### 3.1 各変数の記述統計量及び相関係数

分析対象者の特性と分析に用いた変数の記述統計量をまとめたのが表1である。

平均年齢は、共働き男性が37.7歳、片働き男性が36.2歳、共働き女性が36.2歳である。また、第1子の平均年齢は、それぞれ7.8歳、5.4歳、7.5歳、同居している子供の人数は、平均で2.0人、1.8人、1.8人である。

WFC度をみると、共働き男性で2.54、片働き男性で2.65、共働き女性で2.22となり、女性に比べて男性、なかでも片働き男性で高くなっている。(最大値=4、最小値=1)。また、配偶者関与度(会話時間)は、それぞれ7.8時間、8.9時間、8.2時間と片働き男性でやや長く、子供関与度や家事実施度は男性に比べて女性で高い傾向がみられた。

表1. 分析対象者の特性と主な変数の記述統計量

	共働き男性 (n=144)		片働き男性 (n=155)		共働き女性 (n=180)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
対象者年齢	37.70	5.210	36.20	4.593	36.17	4.677
配偶者年齢	36.15	5.136	34.46	4.287	38.19	5.571
第1子年齢	7.83	3.387	5.35	3.407	7.47	3.343
同居子数	1.98	0.631	1.79	0.655	1.81	0.725
親同居ダミー (1=同居、0=非同居)	0.21	0.408	0.19	0.396	0.27	0.446
WFC度	2.54	0.981	2.65	0.951	2.22	0.960
配偶者関与度(会話時間)	7.82	5.258	8.87	6.398	8.02	5.801
子供関与度	10.03	2.812	9.90	2.739	12.07	2.359
対象者家事実施度	9.40	3.880	8.26	2.887	21.24	3.267
配偶者家事実施度	21.22	3.552	22.34	2.450	8.08	3.287
配偶者労働時間(時間)	6.52	2.199	0.00	0.000	10.01	1.846
ジェンダー役割意識	7.88	2.641	8.95	2.233	6.98	2.362

次に、重回帰分析に用いた各変数の相関行列を示す(表2)。

表2をみると、WFC度と相関がみられる家族領域変数は、共働き男性では子供関与度、片働き男性では配偶者関与度と子供関与度、共働き女性では配偶者関与度、子供関与度、本人の家事実施度のすべてで相関がみられる。

表 2. 重回帰分析に用いた変数の相関行列

共働き男性 (n=144)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
① WFC度	1									
② 配偶者関与度	-0.136	1								
③ 子供関与度	-0.240 **	0.289 ***	1							
④ 対象者家事実施度	-0.049	0.162 *	0.329 ***	1						
⑤ 配偶者家事実施度	0.008	0.129 †	-0.197 **	-0.440 ***	1					
⑥ 第1子年齢	-0.020	-0.136 †	-0.305 ***	-0.257 **	0.289 ***	1				
⑦ 同居子数	0.109 †	-0.053	-0.268 **	-0.248 **	0.224 **	0.486 ***	1			
⑧ 親同居ダミー	0.066	-0.038	-0.006	-0.030	-0.128 †	-0.039	-0.146 *	1		
⑨ ジェンダー役割意識	0.126	-0.144 *	-0.232 **	-0.247 **	0.233 **	0.187 *	0.103	0.011	1	
⑩ 配偶者労働時間	0.097 †	0.035	0.071	0.256 **	-0.353 ***	-0.188 *	-0.114 †	0.211 **	-0.190 *	1

  

片働き男性 (n=155)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
① WFC度	1									
② 配偶者関与度	-0.312 ***	1								
③ 子供関与度	-0.325 ***	0.388 ***	1							
④ 対象者家事実施度	-0.114 †	0.274 ***	0.206 **	1						
⑤ 配偶者家事実施度	0.092	-0.048	-0.059	-0.492 ***	1					
⑥ 第1子年齢	0.072	-0.219 **	-0.196 **	-0.100	0.132 †	1				
⑦ 同居子数	0.172 *	-0.271 ***	-0.204 **	-0.108 †	0.162 *	0.593 ***	1			
⑧ 親同居ダミー	-0.009	-0.058	-0.132 †	-0.146 *	-0.081	0.007	-0.015	1		
⑨ ジェンダー役割意識	0.089	-0.036	-0.053	-0.127 †	0.064	0.127 †	-0.039	-0.062	1	
⑩ 配偶者労働時間	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1

  

共働き女性 (n=180)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
① WFC度	1									
② 配偶者関与度	-0.155 *	1								
③ 子供関与度	-0.150 *	0.209 **	1							
④ 対象者家事実施度	-0.298 ***	0.039	0.086	1						
⑤ 配偶者家事実施度	0.224 **	-0.030	0.094	-0.450 ***	1					
⑥ 第1子年齢	-0.027	-0.216 **	-0.230 **	0.184 **	-0.122 †	1				
⑦ 同居子数	-0.034	-0.176 **	-0.204 **	0.277 ***	-0.155 *	0.466 ***	1			
⑧ 親同居ダミー	0.054	0.005	-0.114 †	-0.125 *	-0.092	-0.033	0.026	1		
⑨ ジェンダー役割意識	-0.210 **	0.071	0.144 *	0.322 ***	-0.146 *	0.088	-0.090	-0.086	1	
⑩ 配偶者労働時間	0.021	-0.190 **	-0.048	0.049	-0.122 †	0.014	-0.022	0.037	0.018	1

注：† p < .1, \* p < .05, \*\* p < .01, \*\*\* p < .001

### 3.2 WFC度を目的変数とした重回帰分析結果

重回帰分析の結果をまとめたのが表3である。

共働き男性の場合、モデル自体の適合度や有意性は高くないものの、WFC度に関係する家族役割変数は子供関与度であり、子供関与度が低くなると、WFC度が高まるという関係がみられる。

次に片働き男性の結果をみると、配偶者関与度、子供関与度がWFC度と有意な関係を示す。配偶者との関わりが減少したり、子供との関わりが減少すると、片働き男性のWFC度は高まるという関係が読み取れる。

最後に共働き女性の場合は、WFC 度と有意な関係を示すのは本人の家事実施度である。共働き女性の場合、自身の家事頻度が低下すると WFC 度が高まるという関係がみられる。

表 3. WFC 度を目的変数とした重回帰分析結果（標準化偏回帰係数）

	共働き男性 (n=144)	片働き男性 (n=155)	共働き女性 (n=180)
配偶者関与度	-0.085	-0.215 *	-0.114
子供関与度	-0.219 *	-0.241 **	-0.109
対象者家事実施度	0.043	0.039	-0.184 *
配偶者家事実施度	0.033	0.073	0.134
第1子年齢	-0.159	-0.114	-0.013
同居子数	0.136	0.128	-0.008
親同居ダミー	0.056	-0.034	0.021
ジェンダー役割意識	0.102	0.087	-0.106
配偶者労働時間	0.109		0.020
対象者労働時間			
定数	2.439 *	2.548 *	3.971 ***
F	1.789 †	3.722 **	3.163 **
Adj-R2	0.047	0.124	0.098

注：† p < .1、\* p < .05、\*\* p < .01、\*\*\* p < .001

以上の分析結果において注目されるのは、共働き男性、片働き男性、共働き女性により、WFC 度に関係する家族役割変数が異なるという点である。特に男性の場合、配偶者や子供といった家族成員との関わりの多寡が WFC 度と結びつくのに対し、女性の場合、家事実施度 WFC 度と結びつくという相違がみられる。男性の場合、例えば妻が働いている共働きの場合でも、家事実施度の低さは WFC 度には結びついていないのである。

#### 4. まとめと考察

本稿の目的は、家族・家庭におけるどのような時間ないし行動が阻害されると WFC と認識されるかを探ることであった。この視点で分析結果をまとめると、以下のようになる。

- ① WFC 度に関係する家族役割の中身は、男性と女性で異なる。また、男性においても、夫婦共働きの男性と妻が就業していない片働き男性により異なる。
- ② 共働き男性の場合、子供と関わる程度が少ないと WFC 度が高まる。
- ③ 配偶者が就業していない片働き男性の場合は、配偶者や子供との関わる程度が少ないと WFC 度が高まる。
- ④ 一方、共働き女性の場合は、家事実施度が低い状態だと WFC 度が高まる。

今回の分析からは、それぞれのグループによって WFC 度に関係する家族役割の中身が異なってくるのが明らかになったが、では、それぞれのグループにおいて「仕事の原因で」実施度が下がっている家族役割領域とはどこか。最後にその点を確認しておきたい。

それぞれのグループにおいて、3つの家族役割領域（配偶者関与度、子供関与度、家事実施度）を目的変数とし、先の重回帰分析で用いた変数及び本人の1日あたり平均労働時間を説明変数とした重回帰分析を行うことで、本人の労働時間と各家族役割領域との関係を確認する。その結果をまとめたのが表4である<sup>2</sup>。

表4. 各家族役割領域を目的変数とした重回帰分析結果（標準化偏回帰係数）

	共働き男性 (n=144)			片働き男性 (n=155)		
	配偶者関与度	子供関与度	家事実施度	配偶者関与度	子供関与度	家事実施度
対象者労働時間	-0.096	-0.421 ***	-0.224 **	-0.156 †	-0.202 *	-0.054
配偶者家事実施度	0.257 **	0.027	-0.281 **	0.007	-0.018	-0.492 ***
第1子年齢	-0.174 †	-0.246 **	-0.086	-0.094	-0.117	-0.004
同居子数	-0.005	-0.137	-0.131	-0.206 *	-0.119	-0.029
親同居ダミー	-0.035	-0.071	-0.136 †	-0.049	-0.120	-0.188 **
ジェンダー役割意識	-0.133	-0.072	-0.070	-0.026	-0.037	-0.105
配偶者労働時間	0.081	0.051	0.158 †			
定数	5.670	19.269 ***	22.357 ***	19.506 **	15.447 ***	23.812 ***
F	1.812 †	8.413 ***	8.443 **	2.969 **	3.089 **	10.200 ***
Adj-R2	0.038	0.266	0.267	0.071	0.075	0.264

  

	共働き女性 (n=180)		
	配偶者関与度	子供関与度	家事実施度
対象者労働時間	-0.031	-0.079	-0.247 ***
配偶者家事実施度	-0.077	0.076	-0.351 ***
第1子年齢	-0.179 *	-0.195 **	0.003
同居子数	-0.109	-0.100	0.205 **
親同居ダミー	0.013	-0.085	-0.103 †
ジェンダー役割意識	0.062	0.136 †	0.216 **
配偶者労働時間	-0.199 **	-0.032	0.027
定数	18.728 ***	13.403 ***	22.477 ***
F	2.846 **	3.035 **	16.386 ***
Adj-R2	0.067	0.075	0.376

注：† p < .1、\* p < .05、\*\* p < .01、\*\*\* p < .001

表4からは、それぞれのグループにおいて、労働時間が長くなると関与度が低下する家族役割領域は、共働き男性の場合は子供関与度と家事実施度、片働き男性の場合は配偶者関与度と子供関与度、共働き女性の場合は家事実施度であることがわかる。

つまり、共働き男性の場合は労働時間が長くなることで子供関与度や家事実施度が低下するが、そのうち、子供と関わる時間が取れないことが、本人のWFC度に影響する、とい

<sup>2</sup> 本人の1日あたり平均労働時間の平均値及び標準偏差値は、共働き男性では平均値=10.10（時間）、標準偏差=1.814、片働き男性では平均値=10.06（時間）、標準偏差=1.766、共働き女性では平均値=6.76（時間）、標準偏差=2.222だった。

う図式になっていると考えられる。逆にいえば、労働時間が長くなることにより阻害された家事実施度は、共働き男性の場合は必ずしも WFC には結びつかないのである。

一方、片働き男性の場合は、労働時間が長くなることにより阻害された配偶者関与度や子供関与度が本人の WFC に結びつく。また、共働き女性の場合も、労働時間が長くなることにより阻害された家事実施度が本人の WFC に結びつくという図式になっていることが伺われる。

このように、夫婦共働きか否かに関わらず、男性の場合、家事実施度の低さが WFC 度に関係せず、妻や子供などの家族との関わり具合が WFC 度に関係するという結果がみられた。この結果からは、男性の WFC 度の緩和には、家族と過ごす時間や機会を確保することが有効であると考えられる。WLB の文脈で考えれば、男性にとっては、よりバランスのとれた生活状態とは家族と過ごす時間が得られるような状態のことである。だが、裏返せば、よりバランスのとれた生活が実現した場合も、男性にとって家事遂行はさして重要なことではなく、結果的には男性による家事遂行には結びつかないままである可能性を示唆する。

最後に、今後の課題をまとめておきたい。

本稿では、WFC 度に結びついている家族役割領域とは何かを明らかにすることを試みた。だが、本稿で分析の対象とした役割とは、家族役割領域でも一部の領域にすぎない。また、対象とした人々も、その年代や家族特性などからみれば、一部の層にとどまらざるをえなかった。その意味では、本稿における分析は、課題の一部を試行したにとどまる。本稿で取り上げたテーマを掘り下げるには、今回の分析から除外せざるを得なかった視点を含めてより包括的な形で調査・分析を進める必要があると考える。

また、本稿における関心事は WFC における家族領域の問題だが、同様の視点で、FWC における職業領域の問題も考えられかもしれない。つまり、家族役割により阻害される仕事役割の中でも、具体的にはどのような側面で、阻害されているのか、という問題である。この点も、今後の課題のひとつとしたい。

## [文献]

裴智恵, 2005, 「日本と韓国における男性の『ワーク・ファミリー・コンフリクト』」 渡辺秀樹編『現代日本の社会意識-家族・子供・ジェンダー』慶應義塾大学出版会, 63-84.

Carlson D. S., Kacmer K. M., Williams L. J., 2000, "Construction and Initial Validation of a Multidimensional Measure of Work-Family Conflict," *Journal of Vocational Behavior*, 56: 249-276.

Frone M. R., Yardly J. K., Markel K. S., 1997, "Developing and Testing an Integrative Model of the Work-Family Interface," *Journal of Vocational Behavior*, 50(2): 145-167.

藤本哲史, 吉田悟, 1999, 「ワーク・ファミリー・コンフリクト: ふたつの研究潮流と経営組織における問題点」『組織科学』33(2):66-78.

- Greenhaus J. H., Beutell N. J., 1985, "Sources of Conflict Between Work and Family Roles," *Academy of Management Review*, 10(1): 76-88.
- Gutek B. A., Searle S., Klepa L., 1991, "Rational Versus Gender Role Explanations for Work-Family Conflict," *Journal of Applied Psychology*, 76(4): 560-568.
- 井田瑞江, 松信ひろみ, 永井暁子, 内田哲郎, 大山治彦, 2009, 「家族の結びつきと『食』—家庭における『食行動』が家族に果たす役割と課題」『食生活科学・文化及び環境に関する研究助成 2007 年度』(財団法人アサヒビール学術振興財団) 22: 65-74.
- 金井篤子, 2002, 「ワーク・ファミリー・コンフリクトの規定因とメンタルヘルスへの影響に関する心理的プロセスの検討」『産業・組織心理学研究』15(2):107-122.
- 金井篤子, 2006, 「ワーク・ファミリー・コンフリクトの視点からのワーク・ライフ・バランス考察」家計経済研究所編『季刊家計経済研究』71:29-35.
- Lambert S. J., 1990, "Processes Linking Work and Family: A Critical Review and Research Agenda," *Human Relations*, 43(3): 239-257.
- 松田茂樹, 2006, 「育児期の夫と妻のワーク・ファミリー・コンフリクト: 合理性見解とジェンダー役割見解」『家族社会学研究』18(1): 7-16.
- 西川一廉, 1998, 「米国におけるワーク・ファミリー研究(1): ワーク・ファミリー・コンフリクトをキーワードとして(1)」『桃山学院大学社会学論集』31(2): 17-47.
- 西村純子, 2006, 「ライフステージ、ジェンダー、ワーク・ファミリー・コンフリクト」『第 2 回家族についての全国調査 (NFRJ03) 第 2 次報告書』No.1: 75-88.
- Small S. A., Riley D., 1990, "Toward a Multidimensional Assessment of Work Spillover into Family Life," *Journal of Marriage and the Family*, 52(1): 51-61.
- Voydanoff P., 1988, "Work Role Characteristics, Family Structure Demands, and Work/Family Conflict," *Journal of Marriage and the Family*, 50(3): 749-761.
- 渡井いずみ, 錦戸典子, 村嶋幸代, 2006, 「ワーク・ファミリー・コンフリクト尺度 (Work-Family Conflict Scale:WFCS) 日本語版の開発と検討」『産業衛生学雑誌』48: 71-81.
- 吉田悟, 2007, 「ワーク・ファミリー・コンフリクト理論の検証」文教大学人間科学部『人間科学研究』29: 77-89.

**Is it Problem Which Part of Family Role is Hindered?**  
**— Difference Between the Male and Female about Family Role Contents**  
**Prescribing Work-Family Conflict —**

**Tetsuro UCHIDA**  
**Lifestyle Construction Laboratory LLC.**

The purpose of this report is to clarify when which family role is hindered, it is recognized to be "work family conflict (WFC)" about the time part of WFC. The analysis was carried out using data of NFRJ08, in each male of the dual earner couple, male of the single earner couple and female of the dual earner couple.

As a result of analysis, the following things became clear. (1) The part of the family role to be related to a WFC are different in male and female. Also, in male, it is different from a male of the dual earner couple and a male of the single earner couple. (2) In the case of a male of dual earner couples, his WFC rises if there is little frequency to spend with a child, and in the case of single earner couples, his WFC rises if there is little talking with a spouse and little frequency to spend with a child. However, in the case of a male, the housework frequency is not related to his WFC. Especially, in the case of a male of dual earner couples, the time/behavior spoiled by the length of working hours is frequency to spend with a child and to do housework, but the time/behavior related to a WFC is only frequency to spend with a child. On the other hand, in the case of female of dual earner couples, her WFC rises if there is little frequency to do housework, but the degree of the relation with a spouse and the child is not related to her WFC so much. This result suggests a possibility not to bring the housework participation of the male as a result even if we get the Work/Family Balance society said to be necessary now.

**Key words and phrases:** Work Family Conflict, Contents of Family-Role, Difference between male and female

